

活性化とはいうけれど

20年ほど前のこと。博士課程に進学して鶴岡という地方都市の中心市街地で研究を始めた頃、「饗庭はどういう研究をやっているの？」と同級生に不意に尋ねられた。ちょうどまちづくり三法が制定されたころである。私は都市計画が専門、彼はバリバリの建築家志望だったから、二人の間をつなぐような共通の言葉を探しながら、「中心市街地の活性化だよ」と苦し紛れに答えた。一瞬きょとんとした彼は、笑い出した。聞くと「なんだか政府のパンフレットに載っているような言葉だよ」ということだった。当時の建築家志望の学生は、ポストモダンなどのやや難解な思想に夢中だったので、難しい術語をこねくりまわしていた彼には、たぶん、毒にも薬にもならなさそうな、力のない言葉、というふうを受け取られたのだろう。大学で机を並べて同じように勉強をしたはずなのに、片一方は脱構築とか、リゾームとか、複雑な言葉をつかって仕事を進めている。こちらは活性化とか、まちづくりとか、抑揚のない平べったい言葉を使って仕事を進めている。彼のことが羨ましかったわけでもなく、自分に確固たる自信があったわけでもない。同じ建築学科でも、専門とする分野がちょっと違うだけで、こんなにも言葉は通じなくなるものなのだろうか。

このことはずっと引っかかっていた。都市計画やまちづくりにおいて様々な人たちとどういう言葉をつかってコミュニケーションができるのか、

という問題である。

その後に鶴岡では、市民を集めたワークショップを開いたり、商店街の人たちを集めたデザインゲームを開いたり、行政やNPOで働く人たちと何時間も会議をしたりした。それは私にとって、言葉の修行であった。いわゆる市民参加やまちづくりということ、頭でっかちに始めた私にとって、街場で出会う人たちは、全く言葉が通じない人たちだった。その人たちと言葉を介してコミュニケーションを組み立て、合意を形成していかないとまちづくりは進まない。「合意形成」という言葉ですら普通の人たちには伝わらないし、「ワークショップ」も「なにそれ」という感じ。

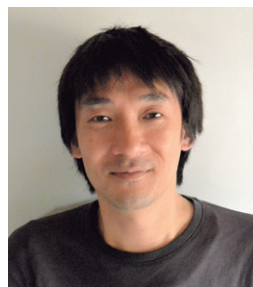
あれこれ試してみて、なんだか使えるな、と思った言葉がいくつかあった。「まちづくり」「コミュニティ」、そして他にもない「活性化」という言葉。これらの言葉は鶴岡で出会った人たちと私の最大公約数のようなものだった。どうとでも意味が取れ、曖昧であるがゆえに、たくさんの人たちが「まあ、そんなもんかな」と納得した気になってしまう言葉。そしてこれらの言葉でまとめた計画は、いろいろな人が考えていることを、大雑把にまとめたようなものになった。

その後から現在に至るまで鶴岡では「まちづくり」が続いているので、これらの言葉はそれほど悪いものではなく、様々な人たちを緩やかにつなぐ役割を果たしてきた、ということなのだろう。

東京都立大学 都市環境学部 教授

あい ば
饗 庭

しん
伸



そしてその後もいろいろな町の計画をつくるお手伝いをしてきたが、びっくりするような言葉に出会うことはついぞなかった。どこにいても、ひたすら「まちづくり」「コミュニティ」「活性化」といった曖昧な言葉が公用語のように使われている。都市計画やまちづくりにおける言葉の問題への、私なりの答えは、「曖昧な言葉を使う」ということであった。

では、なぜ曖昧な言葉でしか、私たちは物事を決めることができなくなったのだろうか。若い頃の私は、民主主義のようなものが頭に染み付いていたので、みんなが協力しないといけないと考えていた。例えるならば、10人が力を合わせるのがまちづくりであり、言葉はそれをまとめるものであった。それぞれが使っている言葉の最大公約数が共通の言葉であり、10人が100人になり、1,000人になり、10,000人になればなるほど、共通の言葉はどんどん曖昧になる。曖昧さは必然であった。

しかしこのところ、10人を一つにまとめるのではなく、例えば1+1のペアを5つ作ってみる、5と3と2の組み合わせでそれぞれよかれと思うことをやってみる、こういうたくさん組み合わせを包摂したものがまちづくりである、と考えるようになってきた。その一つの理由は、あちこちに空き家や空き店舗がごろごろと出てきていて、一つの敷地にみんなが集中しなくても、いい

街をつくれるようになってきたこと、そしてもう一つの理由は20年ほどこういう仕事をしてきて、結局のところ、細かなところまで人々が合意することなぞありえない、ということが分かってきたからだ。まとまることに時間と労力をかけなくても、豊かな空間を手に入れることが出来る。人口が増え都市が拡大する時代には資源が不足するから、それを公平に配分するために全員の合意形成が必要になるが、もう、ちょっとした合意形成で都市をたやすく変えることが出来るようになってきている。その時に、そこでどういう言葉が使われるのか、最大公約数ではない、具体的な、新しい言葉はどう立ち現れてくるのだろうか。そこに私たちの新しい「活性化」の発明があるのではないだろうか。

ざわざわとした活性化、しっとりとした活性化、がつつとした活性化、うんざりとした活性化、適当に頭に思い浮かんだ形容詞を「活性化」につけて、頭の体操をしてみた。言葉とは不思議なもので、組み合わせた途端にイメージが湧いてくる。このイメージを、2人とか、5人とかで物事を進めていくときの合言葉にして、見たことのない豊かさ、見たことのない活性化を作り出していく。そんな試みが集積したものが、次代の都市ということではないだろうか。